批評と紹介

ファルザーネ・ゴシュタースブ著
『アーザル・カイヴァーン――伝記・業績・思想――』

青木　健

1. 序言

本書は，2021年11月にテヘランで出版された全392ページの浩瀚なペルシア語研究書である。内容としては，表題の通り，16世紀～17世紀にイランとインドで活躍した思想家アーザル・カイヴァーン（1533年～1618年）の伝記・業績・思想を扱う。近世ペルシア語世界のインテレクチュアル・ヒストリーの中でも，比較的マイナーな部類に属するこの思想家を取り上げて一書を編んだ著者の勇気に，先ずは敬意を表したい。この壮挙によって，マイナーがマイナーに留まらず，その重要性が広く認知されることを期待したい。

著者はファルザーネ・ゴシュタースブ（1973または1974年～）といい，現在はイランの人文文化研究所の准教授を務める。イランでは人口の0.03パーセント程度しか居ないゾロアスター教徒の女性である。何故この点を強調したかと云えば，アーザル・カイヴァーンは20世紀の研究段階では，近世ゾロアスター教史上の神秘主義思想家と捉えられており，これが著者の研究動機と考えられるからである。尤も，著者が研究を進めれば進めるほど，そうではなかったと云う結論が導かれているのだが。

2. 資料的基盤

アーザル・カイヴァーンを，その弟子たちも含めた「アーザル・カイヴァーン学派」として見た場合，従来の研究では資料上の困難を免れなかった。この学派はほぼ3世代約100年間に亙って展開し，第1世代のアーザル・カイヴァーンの活動期間の後半である1590年頃にイランからインドへ移住した。その活動期間の下限は，第3世代である孫弟子モーベド・シャーの生存が確認される1652年である。従来，彼らの活動を復元するのに活用

された資料は，アーザル・カイヴァーンと直接の面識が無いモーベド・シャーの『ダベスターネ・マザーヘブ』(1)に留まり，しかもその現存写本の書写年代は相当に下る。この資料状況に即してアーザル・カイヴァーン学派を語るのは，隔靴掻痒の憾みがあった。

しかし，2020年代に入ってからは，２つの方法でこの難点がクリア可能になった。第１に，『ダベスターネ・マザーヘブ』の新出写本の発見である（p. 56）(2)。しかも，それは，1650年作成の著者直筆本であった。これによって，『ダベスターネ・マザーヘブ』の内容理解が大幅に更新されると共に，筆名「モーベド・シャー」の人物が社会的に名乗っていた名前が「ミールザー・ズルファカール・アーザル・サーサーニー」だったと判明した。

第２に，アーザル・カイヴァーンの直弟子であるバフラーム・ファルハード（1624年没）の著書『シャーレスターネ・チャハール・チャマン』（以下，『シャーレスターン』）の全面的な活用である（pp. 81–82）。本書は既知の文献で，ボンベイで19世紀に石版刷りが出版されている(3)。だが，稀覯本で入手困難であること，４部構成のうち第４部が欠落した残欠書であることなどから，評者を含めた研究者は，充分な目配りをしてこなかった。しかし，実際に活用してみると，情報の宝庫であった。評者は，24年前に入手したまま研究室の書棚に埋もれていた『シャーレスターン』のコピーを，恨めしく見つめているところである。

著者は，これ以外にも，アーザル・カイヴァーン学派の現存文献８冊の写本情報を博捜して提供している（pp. 49–82）。その努力は大いに多としたいが，余りに網羅的に写本情報を書き込んでおり，その多くは不要ではあるまいかと疑われる欠点を持つ。即ち，それらの写本が意味を持つとすれば，石版刷り出版以前の書写本に限られるだろう。しかし，著者が提供する写本情報は書写年代を一切欠いており，そこが判断できない。試みに『ジャーメ・カイホスロー』と云う文献を挙げるなら，著者が紹介する４冊の写本情報のうち，評者が知る限り石版刷り以前の書写年代を持つのは１冊だけである。

尤も，これらは瑕疵である。著者が最大の力点を置いて活用している資料は『シャーレスターン』であり，本書の価値は，ここから彼女がどれだけの情報を適切に引き出しているかに掛かっている。次に，その点に注目してみよう。

3. 古代ペルシアの「照明学派」

最初に，研究者が「アーザル・カイヴァーン学派」と名付けている思想家たちの自己認識を取り上げよう。アーザル・カイヴァーン本人はこのような呼称は用うべくもないし，逆にモーベド・シャーは10以上の異称を挙げており，この点は頗る曖昧だった。しかし，『シャーレスターン』には，「照明学派の師スフラワルディーの死後，それを継承したのは諸学の師アーザル・カイヴァーンであり……」とある（p. 27）。そして，「アーザルとは火ではなく，光の意である」（p. 31）と主張して，自らを「アーザル学派」と呼び，その真義は照明学派であると定義している。直弟子世代では，明確に「照明学派」との自己規定が確認できる。

では，それとゾロアスター教は如何なる関係にあるかと云えば，「ゾロアスター教徒（ベフディーン）たちは，表面崇拝者（ザーヘル・パラスト）である」（p. 31），「アーザル派とゾロアスター教徒は別である」（p. 32）と両者の関係を否定する(4)。その上で，「アーザル派はペルシア人ではあるが，イラン人全体は含まない」（p. 29）と述べ，ハディース「アラブ人ではクライシュ族，イラン人ではペルシア人」を引用して，ペルシア人の優位を主張する（p. 30）。つまり，アーザル派とは，古代ペルシアに継承されてきたゾロアスター教とは別種の叡智の継承者で，その叡智とは何を隠そう照明哲学の謂いなのである。

しかしながら，著者の分析によれば，その根拠は結局のところ，照明学派の文献を我が物と見做す幻想にあった。著者は，失われたアーザル・カイヴァーン学派の文献の逸文を『シャーレスターン』から拾い集め，これを分析している。それによれば，アーザル・カイヴァーンの散逸した著書『アーイーネ・イスカンダル』は，スフラワルディーの『タルウィーハート』やダッワーニーの『ラワーミゥ』から採録されている（p. 86）。同じく散逸した著書『パルトウ・ファルハング』の一部は，ダッワーニーの著書から抜粋されている（p. 87）。同じく散逸した著書『タフテ・タークディース』の一部は，スフラワルディーの著書に由来する（p. 89）。別の孫弟子による『ザルドシュト・アフシャール』の一部は，クトゥブッディーン・シーラーズィーの『ヒクマト・アル・イシュラーク』のペルシア語訳である（p. 79）。いわば，「アーザル派」が「照明学派」を名乗る所以は，12世紀以降

のイスラーム思想文献を，イスラーム以前の「古代ペルシアの叡智」に逆投影して得られたものであった。これを精緻な文献学的照合作業によって明確にした点は，著者の大きな功績である。

4. 照明学派と聖典『ダサーティール』

だとすると，評者にとって不可解なのは，この思想家たちの強い照明学派的傾向と，彼らが古代ペルシアの聖典と崇める『ダサーティール』との関係である。古代ペルシアの預言者の託宣の集大成とされる『ダサーティール』は，古代ペルシア語と称する人造言語アースマーニー語で書かれ，それにアラビア語語彙を排除した純粋ペルシア語で注釈が付されている。おそらくは，アーザル・カイヴァーンの著作であろうと考えられてきた。当然，アーザル・カイヴァーン学派文献の頂点に立つべき聖典なのだが，この学派の書物の中で，アースマーニー語本文の引用は全く見受けられず，純粋ペルシア語注釈の引用が僅かに見出される程度である（p. 72）。

この状況に対して，著者は，「現行『ダサーティール』はアーザル・カイヴァーン没後に成立し（p. 74），アースマーニー語もアーザル・カイヴァーン没後に偽造された」との主張を展開する（p. 75）。理論的にはあり得る解釈だが，評者には無理筋と思える。著者は気付いていないようだが，アリー・アシュラフ・サーデギーが2020年の論文で「アースマーニー語はアーザル・カイヴァーン以前のデリー・サルタナット期のペルシア語辞書に確認される」と指摘しており(5)，評者はこれに納得している。評者には，著者の論理展開とは真逆の「『ダサーティール』とアースマーニー語はアーザル・カイヴァーン以前に成立し，後にアーザル・カイヴァーン学派に吸収された」との論理構成の方が可能性が高いと思われる(6)。

5. ゾロアスター教とマニ教

アーザル・カイヴァーンは，ゾロアスター教を超える「古代ペルシアの照明学派」の申し子を以て自任していた。とはいえ，彼らの思想史の中では，ゾロアスター教も一応は古代ペルシアの教えの中に包摂される。その論理はこうである。まず，ゾロアスターが預言者であることは，スフラワルディーの証言によって担保される（p. 122）。相変わらず，スフラワルディーへ圧倒的な信頼である。それなら『クルアーン』に言及があるはず

だが，驚くべしゾロアスターはイブラーヒームの別名なのである（p. 124）。

その齎すところの聖典『ザンド・アヴェスター』は，『ダサーティール』と同格の権威があるのだが，残念にも象徴的言語で書かれており，ターウィール（神秘的奥義解釈）が必要である（p. 182）。更に，『シャーレスターン』によれば，（ゾロアスター教神官団の職位の一つである）ヘールベド神官とはスーフィーのことであり（p. 195），ゾロアスター教の光輪は完全人間の源とされる（p. 231）。

このような理論武装によって，アーザル・カイヴァーン学派はゾロアスター教に対する肯定的評価を下した。ターウィールなる言葉遣いに，イスマーイール派の思想的影響を看取するのは，評者だけではないだろう。そして，ゾロアスター＝イブラーヒーム説は，いわずもがな東方シリア教会以来の旧説である。評者には，「ヘールベド神官＝スーフィー説」と「光輪＝完全人間の根源説」の２つだけが，アーザル・カイヴァーン学派の独創だと思われる。

しかのみならず，バフラーム・ファルハードは，アーザル・カイヴァーン学派とマニ教の関係を肯定的に捉えている（p. 102）。特に，マーニーを預言者として評価している点は（p. 103）。イスラーム的観点からはコペルニクス的転回である。アーザル・カイヴァーンは，イスラーム的伝統から相対的に自由で，よりペルシア的伝統を重視する人物だった。この点を掘り下げていけば，アーザル・カイヴァーンのバックグラウンド論として，より大きな文脈で纏められた筈である。

6. アーザル・カイヴァーン学派の知的ミリュー

次に，アーザル・カイヴァーンがこのような思想を抱くに至った16世紀イラン・インドの知的ミリューを取り上げよう。尤も，具体的な師資相承の系譜や思想家同士の横の繋がりが判明するのは，寧ろ高弟バフラーム・ファルハードの方である。『シャーレスターン』によれば，バフラーム・ファルハードの先達は，バフラーム・ファルハードからジャラールッディーン・マフムード・シーラーズィー，ギヤースッディーン・マンスール，モッラー・ジャラールッディーン・ダッワーニーと遡る（p. 38）。なるほど，ダッワーニー（1502年没）はペルシア地方で活躍したイスラーム思想家である。彼らの学問的継承者だとすると，イスタフル出身（p. 23）とされる

彼が「古代ペルシアの叡智の後継者」と自称するのも，地理的な意味では根拠が無いでもない。

また，『シャーレスターン』では，アーザル・カイヴァーン学派と交流した同時代の知識人として，ミール・フェンデレスキー，シャイフ・バハーイー，ミール・ダーマード，シャイフ・ファイズィー，アブル・ファズル，シャー・ファトフッラー・シーラーズィー，カーディー・ヌールッラー・シューシュタリー，ムハンマド・アリー・シーラーズィー，ギヤースッディーン・マンスール・ダシュタキー，カマールッディーン・シルワーニー，ジャマールッディーン・マフムード・シーラーズィーなどが挙げられている（pp. 112–114）。確かに当代のイランとインドの思想家を網羅しているのだが，遺憾にもこれ以外の文献で裏付けられない。「アーザル・カイヴァーンは，普段はインドの世俗から身を隠していたものの，書物を以て自らを顕した。諸々の奇跡の学に通じていたほかに，ペルシア語の語彙を蒐集していた」とされるものの（p. 28），客観的な資料に名が現れない理由にはならないだろう。

更に，著者は後述の普遍宗教との関連で，アーザル・カイヴァーンとアクバル・シャー（在位1556年～1605年）の関係を強調する（p. 126）。確かに『シャーレスターン』にはその旨の記述があるが，アクバル・シャー側の資料，例えばアブル・ファズルの著作などにアーザル・カイヴァーン学派に関する記述が確認できない以上，あくまで一方の側からの交流の証言として聞いておいた方が良い。評者は，著者によるこの論点の強調には慎重である(7)。

後代の知識人に関しては，バフラーム・ファルハードの弟子として，ムハンマド・アリー・シーラーズィー，ムハンマド・サイード・イスファハーニー，バフラーム・ファルシャードがいるとされる（p. 38）。しかし，評者には，彼らが何者なのか分からなかった。また，通常，カイホスロー・イスファンディヤールがアーザル・カイヴァーンの息子とされるが，著者はこれを否定している（p. 47）。評者には，その根拠は弱いように感じられた。

7. 禁欲修行・普遍宗教・輪廻転生

照明哲学以外のアーザル・カイヴァーン学派の特徴を，著者は禁欲修行・

普遍宗教・輪廻転生に見る。これらの点を簡単に纏めておこう。

第 1 の特徴であるが，『シャーレスターン』では，「宗教的知識人＝神学者，宗教的禁欲主義者＝スーフィー，非宗教的知識人＝逍遥学派，非宗教的禁欲主義者＝照明学派」と分類している（p. 107）。また，『シャーレスターン』は，12イマーム・シーア派は禁欲修行に否定的であるが（p. 203），「イラン人は禁欲修行に大いに適合性がある」とする（p. 205）。少なくともバフラーム・ファルハードの照明学派理解では，逍遥学派に対する新しい哲学理論の構築よりは，「現前の知識」による自己認識の達成の方に重点が置かれていたようである。

この第 1 の特徴から，第 2 の特徴である普遍宗教への志向が生み出される。即ち，「修行道の前に宗教の相違は無である」（p. 207）との論理が導かれる。これはこれで結構なのだが，残念ながらアーザル・カイヴァーン学派の強い古代ペルシア志向との整合性が取れていない。この点については，特別の説明が必要だっただろう。

第 3 の特徴として，アーザル・カイヴァーンは輪廻転生を信じる点で，イブン・スィーナーなどのイスラーム哲学者たちと異なるとされる（p. 108）。尤も，本人たちの弁に従えば，輪廻転生説は，ホーシャング，スィヤーマク，アガト・ダイモーン，ピタゴラス，ソクラテス，プラトン，スフラワルディーなども唱えているとされ（p. 165），世界の思想界の主流から外れているのは，寧ろイスラーム哲学者たちの方らしいのだが。評者はこの輪廻転生説に，イスマーイール派のタナースフ説か，ヒンドゥー教の影響を想定したい。

8. 結論

本書には，懇切な序論と 6 つもの附論はあるが，全体を通した結論は無い。これは，評者が冒頭で指摘したように，ゾロアスター教徒たる著者がゾロアスター教神秘主義者と想定してアーザル・カイヴァーンを研究したものの，案に相違してそうではなかったことが明白になり，最終結論を下すのに躊躇した結果と推察される。少なくとも，筆者を直接知る評者には，そう思える。

著者に代わって評者が全体を纏めると，アーザル・カイヴァーン学派とは，ゾロアスター教を模倣し，照明哲学を導入しつつ，17世紀イラン・イ

ンドにおける普遍宗教を目指した思想家集団だった。それは，サーサーン朝のマニ教，ガージャール朝のバハーイー教のように，イラン思想史上に間歇的に現れる「普遍宗教への希求」の発露である。『ダサーティール』に用いられたアースマーニー語も，ヒンドゥスターニー語やトルコ語の特徴を具えた一種の包括言語である点を考慮すれば，近世ペルシア語文化圏に於けるエスペラント語と言えるかも知れない。評者は，マニ教におけるマニ文字の試みを連想している。

だが，ここにアーザル・カイヴァーン学派の矛盾もある。ベースがペルシア至上主義の発想で，根底にペルシア民族主義が揺曳しているのである。この点は，既にダニエル・シェフィールドが指摘して，「アーザル・カイヴァーン学派の形成に当たっては，フルーフィー派・ヌクタヴィー派が大きな役割を果たした」(8)と主張しているのだが，本書にはこれに関する言及が無い。著者はシェフィールドの論文を熟知している筈なので，ここが残念な箇所である。とはいえ，本書は諸資料をこれまでにない包括的な視点で纏め上げ，現在のアーザル・カイヴァーン学派研究の到達点を示している。是非とも英訳の刊行を期待したい。

註

(1)　Rahīm Reżāzāde Malek (ed.), *Dabistān-e Mazāhib*. Tehrān, 1983参照。

(2)　Sudev Sheth, “Manuscript Variations of Dabistān-i Mazāhib and Writing Histories of Religion in Mughal India,” *Manuscript Studies*, 4, no. 1, 19–41, 2020参照。

(3)　Bahrām Bīzhan et al. (ed.), *Shārestān-e Chahār Chaman*, Bombay, 1862参照。

(4)　両者の実際の文献的影響関係に関しては，下記で立証されている。Kianoosh Rezania, “Did Āzar Kaivānīs Know Zoroastrian Middle Persian Sources?” *Entangled Religions* (Ruhr University Bochum), 13. 5, 2022参照。

(5)　‘Alī Ašraf Ṣādeghī, “Āyā hama-ye Loġāt-e Dasātīrī barsāḫta-ye peyrovān-e Āzar Kaivān ast?” *Journal of Iranian Studies* XVI (Osaka University, Japan): 96–100, 2020参照。

(6)　Takeshi Aoki, “The Dasātīr and the “Āzar Kaivān School” in Historical Context: Origin and later Development,” *Entangled Religions* (Ruhr University Bochum), 13. 5, 2022参照。

(7)　賛成論としては，Daniel Sheffield, “Exercises in peace: Āzar Kayvānī universalism and comparison in the School of Doctrines,” *Modern Asian Studies*, 56, 959–992, 2022参照。

(8)　Daniel Sheffield, “The Language of Heaven in Safavid Iran: Speech and Cosmology in the Thought of Azar Kayvan and his Followers,” *No Tapping around Philology*, 2014参照。

Farzāneh Goshtāsb, *Āzar Kayvān: Zendegī Nāme, Āthār va ‘Aqā`ed*, Tehrān, 2021, 392p.

（静岡文化芸術大学　文化芸術研究センター　教授）